

古事記におけるタカミムスヒ・カムムスヒの考察

―「死と再生」の視点から―

アンダソヴァ マラル

〔抄録〕

古事記の冒頭にタカミムスヒ・カムムスヒという神が登場する。その神は古事記においてどういう意味を持っているのかについて従来さまざまな研究がされてきた。今回の論文の中で古事記におけるタカミムスヒ・カムムスヒについてシャーマニズムという視点から考察してみたい。タカミムスヒ・カムムスヒが登場する場面を取り

上げ、その分析を通して、この二柱の神は古事記においてどのような意味を持つのか考えてみたい。

キーワード 死と再生、シャーマニズム、タカミムスヒ、カムムスヒ

はじめに

古事記におけるタカミムスヒ・カムムスヒについてその「ムスヒ」という言葉に注目し様々論じられてきている。本居宣長はそれは全ての物を生成する霊異なる力として位置づけている。さらにその解釈を評価し、古事記という作品の中の「ムスヒ」の働きについて神野志隆光は論じている。神野志隆光は古事記を日本書紀と対比させ、中国の陰陽思想に基づいている日本書紀の世界観に対して、古事記の世界観は「ムスヒ」の働きに基づくという。

この論文の中で、タカミムスヒ・カムムスヒに注目し、この二神が登場する場面を具体的にシャーマニズムという視点から分析してみたい。タカミムスヒ・カムムスヒは古事記の物語の中で神々の「死と再生」が繰り返されるときに登場するのである。

1 先行研究と論文の目的

古事記の冒頭部分において最初にあらわる神はアメノミナカヌシ、タカミムスヒ、カムムスヒである。¹三柱とも「身を隠」すと記述されるのだが、冒頭部分にしか登場しないアメノミナカヌシに対してタカミムス

ヒ・カムムスヒは後の物語の中で活躍していく。この二柱の神についてさまざまな視点から論が提示されてきているのである。

では、本居宣長の『古事記伝』からみていきたい。本居宣長は以下のように述べる。^②

産巢は生なり。其は男子女子、又苔の牟須など云牟須にある、物の成出るを云う。(中略)日は書紀に産霊と書かれたる、霊字よく当たれり。凡て物の霊異なるを比と云。

といい、さらに

さて世間に有とあることは、此の天地を始めて、萬の物も事業も悉に皆、此二柱の産巢日大御神の産霊に資て成出るものなり。

という。つまり、宣長によると「ムスヒ」とは物が生成していく霊異な力であり、さらに、この世界にある全てのものは、それは天地もふくめて、この二柱の神の生成の力によってできたものである。

さらに、タカミムスヒ、カムムスヒという神々の捉え方について本居宣長の解釈をみてみたい。

さて此大御神は、如此二柱坐を、記中に其御事を記せるには、二柱並出たまへる処はなくして、或時は高御産巢日神、或時は神産巢日御親命、とかた 一柱のみ出給へる、其の御名は異れども、唯同

神の如聞えたり。仰かく二柱にして一柱の如く、一柱かと思へば二柱にして、其差の髣髴しきは、いと深き所以あることにぞあるべき。

宣長はタカミムスヒ・カムムスヒを一つの神としてとらえ、その名前が違つていても神が一柱であるという。

こうしたタカミムスヒ・カムムスヒを一つの神とする捉え方に反論したのは平田篤胤である。『古史伝』の中に以下のように述べている。^③

高皇産霊神は、男に坐々て、産霊の内事をなむ掌坐し、神皇産霊神は、女神に坐々て、産霊の内事をなむ掌坐ふなる。(中略)其名の出たるに、神産巢日御祖命とあり。御祖命とは、多く母を云例なれば、女神にて内事を掌賜ふこと疑なし。

さらに、スクナビコナが古事記の記事においてカムムスヒの子供と記されているのに、日本書紀の記事ではタカミムスヒの子として記されることを指摘し、それは二柱の「御中に生坐」れたからであるという。^④様々な物はいまでもなく、天地もこの二神の産霊によってなるといふのである。

すべての物が産霊によってできるといふ点では、本居宣長と変わらぬのだが、タカミムスヒとカムムスヒを同一神と捉える宣長に対して、平田篤胤はタカミムスヒを男神とし、カムムスヒを女神とし、その「御中」に凡てが生成するという点では異なっている。

宣長の「ムスヒ」という言葉に対する注釈や、篤胤のカムムスヒに対

する解釈は現在の古事記注釈に影響を与えている。

では、タカミムスヒ、カムムスヒについてどのような研究があるのか、簡単にまとめてみたい。

タカミムスヒについてだが、それは古い日本の神であるという説があり、さらに西宮一民はこの神を始祖とする氏族が多いことを指摘し、タカミムスヒを日本固有な神として位置づけている^⑤。また、岡田精司は祭祀の成立の側から古事記と日本書紀の記事を分析し、もともと日本にあった日神はタカミムスヒであり、それは後にヒルメの神、そしてアマテラスへ変化していったというのである^⑦。

さらに、松前健は「鎮魂祭の現像と形成」の論文の中で、鎮魂祭を分析し、古くはタカミムスヒは生産の神であり、タカミムスヒを皇室の祖先の貴族たちは氏神として祭り、新嘗の祭りにおいて、この神に稲の豊饒を祈ったという^⑧。大和朝廷の草創期の四世紀であったと述べる。これに代わって、入り込んできたのは、伊勢の日神天照大神崇拜の宮廷流入と、その皇祖神化に伴う、伊勢出身の猿女君の太陽呪術であろうことを指摘し、それが大嘗・新嘗の祭式の一部となってきたことで宮廷鎮魂祭は変化していったという。

また、タカミムスヒをもともと古い神として見る説に対して、北方民族に固有の世界観に基づく神観念が朝鮮半島の古代国家を経由して入ってきたとみる説もある^⑨。

これらの説はタカミムスヒについて、歴史、あるいは文化の伝播、あるいは祭祀という視点からとらえるものであり、それらはタカミムスヒを古事記の外においてその存在について論じているのである。

さらに、カムムスヒについての研究をみてみたい。カムムスヒについて二通りの見方がある。それは出雲にかかわる神として捉える立場と、そうでない立場である。松村武雄『日本神話の研究』の中でカムムスヒを出雲の神として捉えている^⑩。さらに、倉塚暉子は「出雲神話圏とカムムスビの神」という論文の中で『出雲国風土記』に登場するカムムスビの記述を取り上げ、出雲におけるこの神の伝承の分布の仕方を分析し、カムムスビは島根半島において生まれた神格であるという^⑪。

平田篤胤のカムムスビを女神とみる説は西郷信綱によつて維持されている。西郷信綱は「御親」とは「母親」を意味していると述べ、さらにカムムスビは出雲神話にかかわって登場するという。また、冒頭部分を見るとおりカムムスビが高天の原の神にまつり上げられていると述べ、タカミムスビ・カムムスビとは生成力の霊妙なはたらきを高天の原の神として二元化したものである。さらに両神の役割は分化しており、タカミムスビはアマテラスと並ぶ神であるのに対し、カムムスビは出雲にかかわっているようにみえるというのである^⑫。

こうしてカムムスビを出雲にかかわる神として捉える立場に対して、西宮一民は古事記の国譲りの段における「この、あが燐れる火は、高天原には、神産巢日の御祖の命の、とだる天の新巢の凝烟の、八拳垂るまで焼き挙げ」という記述を取り上げ、カムムスビは高天の原の神であつて、出雲の神ではないことを述べている^⑬。

これらの研究に対して、タカミムスビ、カムムスビを古事記の作品の中で「ムスビ」の働きとしてとらえる神野志隆光の論がある。神野志は天地の創生までムスビの力によるものだという宣長の解釈を批判しながら

らも、「高天原におけるムスヒの、いわば生成のエネルギーがすべてを導くという、『古事記』の、世界の物語のありようを、ほほいい当てている」と評価をしている¹⁴。

さらに、神野志隆光は古事記、日本書紀の冒頭部分の違いに注目し¹⁵、両書は異なるコスモロジーによって成り立っていると述べている。日本書紀は天地がまだできていない状態から語りだし、陰陽の結合によって全ての物が成り立つという中国の陰陽思想に基づく世界観を持っているという。それに対して、古事記は「天地がすでに成り立ち、高天原という天の世界にムスヒをはじめとする神々が出現とするところから語るものである」と述べている。日本書紀は中国の陰陽思想にもとづいているのに対して、古事記の世界観はムスヒのコスモロジーにあるというのである。

さらに、古事記の冒頭部分の特徴としては、高天原という世界がどのようにできたのかについてふれることなく神の出現を述べるといふ点を挙げている。高天原がどのようにできたのかについて語らないというのはそれが大事ではないからであるという。地の側(「国」)がどのようにして世界となるかが大事であり、天皇が支配していく世界であるからである。そのため古事記とは天皇の神話であり、創生一般は語っていないという。さらに、タカミムスヒの「初発」のエネルギーが高天原をつらぬき、アマテラスにとりこまれ、天孫降臨において王権の由来の根源が語られる。それが古事記の神代の構造であるという。

一方、カムムスヒについては、それは「葦原中国」の世界をおおっている神であり、タカミムスヒとあいまって古事記の神代全体に、分化し

て浸透するという。それをムスヒのエネルギーと呼んでいるのである。

神野志の古事記と日本書紀はそれぞれ別個な作品であり、異なる世界観を持っているという捉え方は以下のように評価できる。以前は古事記、日本書紀は同じ記紀神話というレベルで扱われていた。だが、神野志の提示した視点は古事記、日本書紀を記紀神話という範疇から離れさせ、それぞれの作品の固有な世界観を見出すことを可能にしたのである。その中で、異なる系統にあるタカミムスヒ・カムムスヒという神を古事記の中でムスヒの働きとして統括するという点でもその意義があると思われる。

だが、神野志の視点に対して以下のような疑問が生じる。カムムスヒは「葦原中国」の世界をおおっている神であり、タカミムスヒとあいまって、古事記の神代のコスモロジーであるムスヒの力として位置づけられているのである。前の研究では出雲神話とカムムスヒのかかわりについて論じられているのだが、神野志はあえて「出雲」という言葉を使わずに「葦原中国」の世界にカムムスヒを位置付けている。「出雲」という言葉をさける意味は何か、「葦原中国」と「出雲」とどう違うのかという疑問が生じる。それを神野志の論に沿って考えてみたい。古事記の神代は天皇の支配を語る、その中で「葦原中国」とは高天原の使者によって支配され、後に天皇の祖先となる神々によって支配されていく世界である。そういう世界の中で「タカミムスヒとあいまって」カムムスヒが活躍するのである。「出雲」とは大和と異質性を持つ世界であり、天皇が支配していく世界を語るための神代という構造の中に入らないのである。

高天原において活躍するタカミムスビに対して、カムムスビは出雲を舞台とする神話の中で活躍している。このカムムスビは日本書紀の正文に登場しない神である。^⑬日本書紀は出雲神話も語っていないのである。出雲という世界を持つことは古事記の独自な点であり、その中で活躍するカムムスビに注目し、その性質についての考察が必要だと思われる。さらに、神野志による古事記の構造の把握は天皇が支配すべく世界を語るために、タカミムスビはアマテラスに取り込まれ、天孫降臨において王権の支配を保証するエネルギーとして働いているというものである。だから、古事記において重要な役割を果たす出雲神話を無視しているといえる。出雲において活躍するカムムスビ、出雲神話は古事記の独自な部分であり、それに注目しないことには古事記の固有性を語ることはできないのではないか。

さらに、「ムスヒ」のコスモロジーとはどういうものか考えてみたい。それは神野志による日本書紀の正文の分析をみるとわかるだろう。日本書紀はその冒頭から天地の成り立ちを中国の陰陽思想によって語り、さらに国土生成と神々の生成を陰陽を体現するイザナキとイザナミによるものであるという。それは古事記の物語に対して黄泉の国に行かない、つまり死ぬことがない日本書紀のイザナミの存在からより明確になる。こうした陰陽のコスモロジーが日本書紀の構造を成り立たせていると理解できる。

だが、古事記の場合はどうであろう。古事記の構造はムスビの働きによって成り立っているといえるかどうか、考えてみたい。

本論の中でタカミムスビ・カムムスビという二柱の神ついて古事記作

品の中で考えていくという神野志隆光の論を踏まえながら、シャーマニズムという視点からこの両神についての考察を試みたい。さらに、出雲とカムムスビに焦点をあて、考えてみたい。

2. 古事記における天地創生

古事記は以下のフレーズではじまる。

天地初めて発りし時、高天の原に成りませる神の名は、天之御中主の神。次に、高御産巢日の神。次に神産巢日の神。この三柱の神は、みな独神と成りまして、身を隠したまひき。(古事記上巻)

神野志隆光は古事記と日本書紀のそれぞれの世界観を把握するために、冒頭部分の読みに焦点を当てている。古事記の物語では天地の創生は語られず、高天原はすでにあるものとして描かれ、その中で神々がなっていくことが注目すべきであるという。^⑭それは古事記の構造として捉える視点であり、天皇が支配していく世界である葦原中国について語るべきであって、高天の原の世界はどのようにできたのが大事ではないというのである。

それに対して陰陽の思想によって成り立っている日本書紀の冒頭部分は以下のようなものである。

古に天地未だ割れず、陰陽分れず、混沌にして鶏子の如く、溟滓にして牙を含めり。其の清陽なる者は、薄靡きて天に為り、重濁なる

者は、淹滞りて地に為るに及びて、精妙の合搏すること易く、重濁の凝竭すること難し。故、天先づ成りて地後に定まる。然して後に、神聖其の中に生れり。(日本書紀 神代上 第一段(正文))

天地がまだ分かれていない状態から語りだす日本書紀に比べ、古事記には天地創生が語られないという神野志の論がより明確にわかる。それは作品論という視点であり、その視点からみると古事記の冒頭部分の「天地初めて発れし時に、高天原に成りし神の名は」は天と地がすでにできていると解釈するのが当然であろう。

だが、それに対して異なる見解もある。益田勝実¹⁸は古事記の冒頭部分は神の名を羅列するという独特な方法で述べられていることに注目しこの神々のほとんどが実際に祭られることなく、抽象神として登場することを述べ、神名の羅列の展開は大地創造のプロセスのイメージの展開をささえているという。つまり神々の系図を語るとは、地上のものの発生を語るといふ一つの神話叙述の方式であり、それには原始社会の呪術的想像力が現れるというのである。

古事記の冒頭部分の語りが一つの呪術的な神話叙述の方式であって、その中に創生神話が表現されているというこの指摘を踏まえ、冒頭部分に登場するタカミムスヒ、カムムスヒの活躍をシャーマニズムという視点から考察してみたい。

タカミムスヒ・カムムスヒは「初発」の時の神々であって、古事記において創生が語られる時においてあらわれた神である。そこで宇宙創造神話が持つ意義に注目すべきだと思われる。そこから儀礼において語ら

れる創造神話の持つ力について論を展開しているエリアーデに注目したい。

3. 「死と再生」の視点から

エリアーデは『神話と現実』の中で世界各地の儀礼において朗誦される宇宙創造神話の分析を行っている。¹⁹ここでポリネシアの系譜聖歌、ビル族の治療儀礼に歌われる祭文歌、ナヴァホ・インデアン²⁰の宇宙創造神話を例として引用する。

ポリネシアの系譜聖歌もこれと同じように展開する。クムリポとして知られるハワイの祭文は、「それを伝承してきた王族と、全民族のもので他のポリネシア近親集団においても礼拝される主な神々、アオと呼ばれる生ある世界の家系内に生まれて神化された首長のみならず、天の星に、地上の生に役立つ動植物にも結びつける系譜の祭詞」である。そして、聖歌は事実、次の回想で始まられる――

地が烈して変動したとき、
諸天がそれぞれ変動したとき、
日が月に光を与えるために、
空に昇ったとき、(後略)

このような系譜聖歌は、王女が懐妊すると吟遊詩人によって作られ、フラ・ダンサーに教えこまれ、暗誦される。男女の踊手は王子

出誕まで休みなくこの聖歌を踊り、誦える。それは、あたかも未来の首長の母体内での発育が、宇宙創造神話、世界の歴史、その部族の歴史の再演に伴なわれるかのようなものである。首長の懐妊は象徴的世界「再創造」の機会である。その再演とは歌と踊りを通じて、世界創造以来の重要な神話的できごとを回想するとともに、儀礼中に再現することなのである。

ビル族の治療儀礼の一端は特に興味深い。呪術者は病床の傍らの場所を「浄め」、小麦粉でマンドラ (mandol) を描く。その図形を中心には、イシュヴォルとバグワーンの像と家を配し、この図が病人が完癒するまで保存される。「マンドル」という語そのものがインド起源を立証しており、それがインド・チベット密教儀礼において大きな役割を果たす複雑な図形、マンダラ (mandala) であることはいうまでもない。しかし、マンダラは本来世界像 (imago mundi) で、宇宙の縮図とともにその諸神仏を表すものである。それを構成することは世界を呪術的に再創造することに等しい。それゆえ、ビル族の呪術者が病床の傍らにマンドラを描く際に歌う祭文歌が宇宙創造神話にはつきり触れていないとしても、彼は宇宙創造を反復しているのである。その行動が治療の目的を有することは疑いもない。病人は抽象的に世界創造の次元に立たされ、原初の生命の充実にひたされ、かの時に創造を可能にした巨大な力に滲透される。

これに関連して特筆すべきことは、ナヴァアホ・インデアンにおいては、宇宙創造とそれに続く大地の壊よりの原人出現の神話は、病気を治す場合かシャーマンの加入儀礼中以外にはほとんど朗誦されないという事実である。(中略) その儀式においても、創造の諸段階と諸神・先祖・人類の神話的歴史を象徴する複雑な砂画が描かれる。これらの絵(不思議なことにインド・チベットのマンダラに似ている)は神話時代に起こったできごとを順序に再演する。病人は宇宙創造神話と起源神話が誦されるのを聞き、砂画を観照しながら、世俗的時間を脱し、原初の時の充実に突入し、世界の始めに連れ戻されることによって、宇宙創造を目のあたりにするのである。

以上のことをまとめると宇宙創造を語るということはまだ何もできていないという「始め」の時に連れ戻すことを目的とする。さらに、その創造を可能たらしめた「原初」の力に触れること自体が病氣治療などにおいて重要だとまとめることができる。

こうした例をエリアードは次のように理論化したのである。

宇宙創造神話の儀礼における朗誦は、ある病氣や不具をいやすのに十分な場合がある。しかし、やがて明らかにされるように、この宇宙創造神話の適用は数あるうちの一つにすぎない。あらゆる「創造」の模範型として、宇宙創造神話は病人の生の「新たな始め」を作るのを助けることができる。始原への復帰は再生の希望をもたらすのである。ところで、これまで検討してきたあらゆる治療儀礼は、始

原への復帰をめざしている。(中略)そして「原泉の泉」とは、世界創造時に現出した精力、生命、豊饒のとめどない流出である。

ここで、始原への復帰は再生のを可能にするものであるという指摘に注目したい。病人は宇宙創造神話を朗誦され、まだ何もできていない世界創造以前の状態に連れ戻される。その時は病氣もなかったのである。こうして病人は「原初の生命の充実にひたされ、かの時に創造を可能にした巨大な力」に触れることができ、それによって新しく生まれ変わることができる。

古事記においてタカミムスヒ・カムムスヒは古事記の冒頭にあらわれた神であり、古事記における宇宙創造を体現しているのである。このような視点から、冒頭に登場し、さらに後の古事記の物語でも活躍していくというタカミムスヒ・カムムスヒの存在について考えてみたい。古事記においてタカミムスヒ・カムムスヒはエリアーデのいう「始原」たる存在である。古事記の物語でのこの両神の登場は何を意味するのか。具體的な分析を通して、考察をしてみたい。

3. 1 タカミムスヒ

タカミムスヒはアマテラスの岩戸ごもりに登場するのだが、タカミムスヒが「天の安の河原」の会議の召集主宰者となっていると説かれている⁽²⁰⁾。西宮一民はタカミムスヒはその子思い金の神に命じて、衰えた太陽の蘇生復活をさせるといふ。

ここをもちて、八百万の神、天の安の河原に神集ひ集ひて、高御産巢日の神の子、思金の神に思はしめて、常世の長鳴鳥を集めて鳴かしめて、(古事記上巻)

岩戸にこもったアマテラスを岩戸から出すためにタカミムスヒが活躍するのである。この場面についてそれはアマテラスの死と再生が述べられていると解釈されている⁽²¹⁾。さらに、斎藤英喜はこの岩戸ごもりの体験を通してアマテラスは「邪霊と戦うシャーマン」から「命令を下す至高神」へ変身するというのである⁽²²⁾。そこでその再生を助ける重要な力としてタカミムスヒが登場するのではないだろうか。

次にこの神が登場する場面を見てみよう。葦原中国のことむけの段だが、葦原中国はオシホミミが支配すべき国だということになる。そこで葦原中国は「いたくさやぎてありなり」という状態であり、それを平定するために誰を遣わせばいいのかという会議が開かれる。そこでタカミムスヒはアマテラスとセットで登場する。

しかして、高御産巢日の神・天照大御神の命もちて、天の安の河の河原に、八百万の神を神集へに集へて、思金の神に思はしめて詔らししく、

「この葦原の中つ国は、あが御子の知らず国と、言依さしたまへる国ぞ。かれ、この国に道速振る荒振る国つ神等の多にあるとおもほす。これ、いづれの神を遣はしてか言趣けむ」(古事記上巻)

次に天孫の誕生と降臨において司令者として登場する。

しかして、天照大御神・高木の神の命もちて、太子正勝吾勝々速日天の忍穂耳の命に詔らししく、

「今、葦原の中つ国を平らげつと白す。かれ、言依さしたまひしまにまに降りまして知らしめせ」

しかして、その太子正勝吾勝々速日天の忍穂耳の命の答え白したまひしく、

「あは、降らむ装束しつる間に、子生れ出ぬ。名は、天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸の命、この子降すべし」

この御子は、高木の神の女、万幡豊秋津師比売の命の御合ひはして、生みたまへる子、天の火明の命。次に、日子番能邇邇芸の命の二柱ぞ。ここをもちて、白したまひしまにまに日子番能邇邇芸の命に詔科せて、

「この豊葦原の水穂の国は、いまし知らむ国ぞ、と言依さしたまふ。かれ、命のまにまに天降るべし」(古事記上巻)

葦原の中つ国の支配はオシホミミに委任されるのだが、オシホミミに子供が生まれ、その子供が支配者として遣わされる。西郷信綱はホノニニギが生まれたての嬰兒として天下することに注目し、それは新たな王が誕生し下界に下るという意味であるという。⁽²³⁾ 国の君主となる存在が生まれることにはまさに「始原」の力としてのタカミムスヒを登場させる必要があったわけである。

さらに、タカミムスヒは中巻神武天皇の段に登場する。

かれ、神倭伊波礼毘子の命、そこより廻り幸して、熊野の村に到りましし時に、大きな熊、髣かに出で入るすなはち失せぬ。しかして、神倭伊波礼毘子の命、たちまちにをえまし、また、御戦もみなをえして伏しぬ。この時に、熊野の高倉下、一ふりの横刀を賣ち、天つ神の御子の伏しませる地に到りて献りし時に、天つ神の御子、すなはち寤め起きて、

「長く寝るねたるかも」

と詔らしき。かれ、その横刀を受け取りたまひし時に、その熊野の山の荒ぶる神、おのづからにみな切り仆さえき。しかして、その惑ひ伏せる御軍ことごと寝め起きき。かれ、天つ神の御子、その横刀を獲しゆゑを問ひたまへば、高倉下が答へ曰ししく、

「おのが夢に伝はく、天照大神・高木の神の二柱の神の命もちて、建御雷の神を召して詔らししく、『葦原の中つ国は、いたくさやぎでありなり。あが御子達、不平みますらし。その葦原の中つ国は、もはらいましの言向けし国ぞ。かれ、いまし建御雷の神降るべし』とのらしき。しかして。答へ白ししく、『あは降らずとも、もはらその国を平らげし横刀あれば、この刀を降すべし』とまをしき。(古事記上巻)

タカララジの献剣の条に、タカミムスヒは正氣を失っていた天皇に剣を献上するようにタカララジに命令し、天皇を救った存在として登場す

るのである。正気を失った神武天皇は神劍の靈威によって蘇るのだが、それは死と復活を意味し、その体験を通してイワレビコが天皇の持つべき能力を獲得すると説かれている。²⁴ イワレビコが「天皇」として再生するためには古事記の「始め」に登場したタカミムスヒの存在が必要だと思われる。

タカミムスヒはどのような場面にかかわって登場するのかというと、それは総合的にいうと死と再生が繰り返され、新しい支配者としての存在が生まれるという場面であるといえる。アマテラスは岩戸こもりを通して「邪霊と戦うシャーマン」から「命令を下す至高神」へ変身し、天孫降臨において赤子のホノニギが天下り、熊野を通過したイワレビコは「をえ」の体験を通して「天皇」という存在へ生まれ変わる。つまりその場面の主人公が死と再生を繰り返している時に必ずといっていいほど、タカミムスヒという神が登場する。タカミムスヒという存在は古事記の物語の冒頭に登場する神であって、古事記にとっての「始原」たる存在である。その「始め」に戻り、そのパワーを得、生まれ変わるることができるのである。

3. 2 カムムスヒ

次にカムムスヒが登場する場面をみてみたい。

また、食物を大気都比売の神に乞ひき。しかして、大気都比売、鼻・口より種々の味物を取り出でて、種々作り具へて進る時に、速須佐之男の命その態を立ち伺ひて、穢汗して奉進ると、すなはちその

大気都比売の神を殺しき。かれ、殺さえし神の身に生れる物は、頭に蚕生り、二つの目に稲種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麦生り、尻に豆生りき。かれここに、神産巢日の御親の命、これを取らしめて種と成したまひき。(古事記上巻)

五穀の起源の段においてオホゲツヒメが死に、その体から五穀が生成する場面であるが、ここでカムムスヒは殺されたオオゲツヒメの体になった物を取り、それを「種と成し」たのである。穀物の神は殺されるのだが、その体から稲種、粟などができることはその蘇りを意味すると西郷信綱によって説かれている。²⁵ それは「始原」たるカムムスヒの力によって実現できたといえる。

さらにオホナムズの受難の段においてオホナムズを蘇生させる役割を果たしている。

しかして、追ひ下すを取らす時に、すなはちその石に焼き著かえて死にき。しかして、その御祖の命、哭き患へて天に参上り、神産巢日の命を請はしし時に、すなはちキサ貝比売と蛤貝比売とを遣はして作り活けたまひき。しかして、キサ貝比売きさげ集めて、蛤貝比売待ち承けて、母の乳汁と塗りしかば、麗しき壮夫に成りて、出で遊行びき。(古事記上巻)

次にオホクニヌシが国作りを手伝うというスクナビコナの親として登場する。

かれ、大国主の神、出雲の御大の御前に坐す時に、波の穂より天の羅摩の船に乗りて、鵝の皮を内剥ぎに剥ぎて衣服にして、帰り来る神あり。しかして、その名を問ひたまへども答へず。また、従へるもろもろの神に問ひたまへども、みな「知らず」と白しき。しかして、たにくくの白言ししく、

「こは、久延比古ぞ必ず知りてあらむ」

とまをししかば、久延比古を召して問ひたまふ時に、答へ白ししく、
「こは、神産巢日の神の御子、少名比古那の神ぞ」

かれしかして、神産巢日の御祖の命に白し上げたまひしかば、答へ告らししく、

「こは、まことにあが子ぞ。子の中にあが手俣よりくきし子ぞ。かれ、いまし葦原の色許男の命と兄弟となりて、その国を作り堅めよ」

かれ、それより大穴牟遲と少名比古那と、二柱の神相並びて、この国を作り堅めたまひき。しかる後は、その少名比古那の神は、常世の国に度りましき。(古事記上巻)

スクナビコナがオホクニヌシの国作りを手伝うということはオホクニヌシが名通りの大なる国の王となることを支援するという意味でとらえられる。この役割を果たすのがカムムスヒの子だということに注目したい。オホクニヌシの性質が王として定まることには古事記にとつての「始原」の力、つまりカムムスヒの力を得なくてはならないのである。

さらに、国譲りの段にもカムムスヒが登場する。

かれ、さらにまた還り来て、その大国主の神に問ひたまひしく、「なが子供、事代主の神・建御名方の神の二はしらの神は、天つ神の御子の命のまにまに違はじと白しつ。かれ、ながいかに。しかして、答へ白ししく、

「あが子等二はしらの神の白すまにまに、あも違はじ。この葦原の中つ国は、命のまにまにすでに献らむ。ただあが住所のみは、天つ神の御子の天つ日継知らしますとだる天の御巢のごとくして、底つ石根に宮柱ふとしり、高天の原に氷木たかしりて、治めたまはば、あは百足らず八十垺手に隠りて侍らむ。また、あが子等百八十神は、八重事代主の神、神の御尾前となりて仕へまつらば、違ふ神はあらじ」

と、かく白して、出雲の国の多芸志の小浜に、天の御舎を造りて、水戸の神の孫、孫櫛八玉の神、膳夫になり、天の御饗を献る時に、禱き白して、櫛八玉の神、鵜に化り、海の底に入り、底の波瀬を咩ひ出で、天の八十びらかを作りて、海布の柄を鎌りて、燐白に作り、海尊の柄もちて、燐杵に作りて、火を櫛り出でて伝ひしく、

この、あが燐れる火は、高天原には、神産巢日の御祖の命の、とだる天の新巢の凝烟の、八拳垂るまで焼き挙げ、地の下は、底つ石根に焼き凝らして、栲縄の千尋縄打ち廷へ、釣せし海人の、口大の尾翼鱸、さわさわに控き依せ騰げて、打ち竹の、とををとををに、天の真魚咋献る。

かれ、建御雷の神、返り参上りて、葦原の中つ国を言向け和平しつる状を復奏しき。(古事記上巻)

オホクニヌシに「天の御饗」を献上するクシヤタマの言葉の中にカムムスヒの名が登場するのである。この場面は、オホクニヌシが葦原の中つ国の支配者という存在から「出雲大神」という祭られる神という存在へ変貌するのである。⁽²⁶⁾さらに、その変貌はクシヤタマに祭られることで実現し、オホクニヌシが「出雲大神」として再生しようとするその場面において、クシヤタマが言う言葉の中でカムムスヒが登場し、その「始原」の力として働いてくるわけである。

以上をまとめてみたい。カムムスヒは「生命体の蘇生復活を掌る至上神として重要な働きをする」と解釈されている。⁽²⁸⁾だが、エリアーデの論を踏まえてみると、カムムスヒは古事記において「始め」の時に現れた神であり、その名を挙げることで古事記の物語が「始め」のことを反復する。それができてこそ、物語の中の再生、つまり物語の中で主人公が新しく生まれ変わることができるのである。オホナムヂの蘇生が語られる場においてカムムスヒが登場するのは、古事記はその冒頭に現れた神の名を挙げることでオホナムヂを蘇生させるために時間を「始原」に戻らせる。言い換えれば、オホナムヂは「始め」の「源泉の源」(エリアーデ)に触れることができなかった、蘇生することもできなかっただろう。タカミムスヒ・カムムスヒという神は古事記全体を貫くコスモロジーという働きをしている神というわけではない。エリアーデの論を踏まえていうと、古事記が死と再生について語るときに一番最初に現れた神の名を挙げることで、古事記の「始め」に戻り、その聖なる「始原」の時間を反復することができる。そのため、タカミムスヒ・カムムスヒはその場面ごとの主人公が死と再生を繰り返す中に登場するのである。

古事記の中で死と再生が繰り返されるときに、常にその「始原」のときを反復する。古事記はこうした語られていく世界を内在しているのではないか。

4. カムムスヒと出雲について

では、タカミムスヒとカムムスヒの違いについて考えてみたい。3. 1のところで述べた例をみると、タカミムスヒは高天の原において活躍する。さらに、天皇の先祖となるアマテラス、ホノニギ、カムヤマトイワレビコといった存在が「死と再生」を体験するときにタカミムスヒが登場するのである。

それに対して、カムムスヒはオホゲツヒメとオホクニヌシの段において活躍する。古事記の物語は出雲を舞台として語られているときにカムムスヒが登場するのである。さらに、スクナビコナの親を古事記はカムムスヒに設定しているのに対して、日本書紀はタカミムスヒであると記すことは興味ぶかい。それは古事記にはカムムスヒを出雲を舞台とする神話の中で描こうとする意図が読み取れる。

さらにほぼ全例でカムムスヒは「御祖の命」と呼ばれていることにも注目したい。タカミムスヒは「高御産巢日の神」という名で呼ばれているのに対して、カムムスヒは「神産巢日の御祖の命」と呼ばれているのである。この「御祖の命」とは「母」を意味する例が多いことから、平田篤胤はカムムスヒを「女神」とした。⁽³⁰⁾それは西宮一民によってカムムスヒは出雲神話での「母神」と位置付けられていることにも関わる。⁽³¹⁾西郷信綱も「御祖」とは母親を意味しており、カムムスヒは女神だとする

のである。⁽³²⁾

カムミスヒは古事記の中で出雲神話に深い関係を持ち、さらに女神であることから、出雲は母神を先祖にしていることがうかがえる。三浦祐之は『古事記の秘密』の中で垂仁天皇の段に登場するサホビメの記述を取り上げ、サホビメが三代にわたる母系の系譜をもつという⁽³³⁾。こうした母系の系譜は古事記に存在しており、それが古事記の古層性にかかわっていくと論じているのである。

古事記の中での出雲が女神であるカムミスヒを母神としていることは古事記の古層性と関連していく可能性がある。それをこれからの課題として考えていきたい。

おわりに

本論の中で古事記におけるタカミムスヒ・カムミスヒについて検討してきた。神野志隆光の「ムスヒ」の働きを古事記の構造の中で捉えるということに対して、両神の活動を「死と再生」の視点から考えてみた。その結果、古事記が死と再生について語るときに古事記における宇宙創造が語られた時に現れた神としてタカミムスヒ・カムミスヒを登場させることで、古事記の「始め」に戻り、その聖なる「始原」の時間を反復するということができる。

さらに、タカミムスヒは高天原において支配者となる存在が生まれる時に登場するのに対して、カムミスヒは出雲において活躍する。さらに「御親の命」と呼ばれるこの神は母神であることを確認した。それは古事記の古層性とどうかかわっていくのか、これから検討していきたい。

〔注〕

- (1) タカミムスヒ、カムミスヒは先行研究の中で、タカミムスビ、カミミスビなどと記されることもあるが、本論の中で西宮一民の『古事記』に従い、タカミムスヒ、カムミスヒと統一する。
- (2) 本居宣長『古事記伝』岩波書店 一九九六
- (3) 平田篤胤『古史伝 第一巻』『平田篤胤全集 第一巻』名著出版 一九七七
- (4) 例としてスクナビコナについての記述を取り上げたい。古事記ではスクナビコナはカムミスヒの子と記される。「かれしかして、神産巢日の御祖の命に白し上げたまひしかば、答へ告らししく、「こは、まことにあが子ぞ。子の中にあが手俣よりくきし子ぞ。かれ、いまし葦原の色許男の命と兄弟となりて、その国を作り堅めよ」(古事記上巻)。それに対して日本書紀では以下のような記述がある。「時に高皇産靈尊、聞こしめして曰はく、「吾が産める児、凡て一千五百座有り。其の中に一児最悪しく、教養に順はず。指間より漏き落ちしは、必ず彼ならむ。愛みて養すべし」とのたまふ。此即ち少彦名命、是なり。」(日本書紀 神代上「第八段」一書第六)
- (5) 松村武雄『日本神話の研究 第二巻』培風館 一九五五
- (6) 西宮一民「付録 神名の釈義」『古事記』(新潮日本古典集成) 西宮一民校注 新潮社 二〇〇五(初版 一九七九)
- (7) 岡田精司『古代王権の祭祀と神話』培風館 一九七〇
- (8) 松前健「鎮魂祭の現像と形成」『日本祭祀研究集成 第一巻 祭りの起源と展開』名著出版 一九七八
- (9) 溝口睦子『王権神話の二元構造―タカミムスヒとアマテラス』吉川弘文館 二〇〇〇
- (10) 5に同じ
- (11) 倉塚睦子「出雲神話圏とカミムスビの神」『日本神話Ⅰ』有精堂出版株式会社 一九七〇
- (12) 西郷信綱『古事記注釈 第一巻』、『古事記注釈 第二巻』筑摩書房 二〇〇五

- (13) 6に同じ
 - (14) 神野志隆光『古事記と日本書紀』講談社現代新書 一九九九
 - (15) 神野志隆光『古事記の達成』東京大学出版会 一九八三
 - (16) ただし、一書のほうに登場する。「又曰く、高天原に生れる神、名けて天御中主尊と曰す。次に、高皇産靈尊。次に神皇産靈尊。皇産靈、此には美武須毘と伝ふ」とある。(日本書紀 神代上「第一段」一書第四)
 - (17) 15に同じ
 - (18) 益田勝司「幻視」『火山列島の思想』筑摩書房 一九六八
 - (19) ミルチャ・エリアーデ「始原の魔力」『神話と現実』エリアーデ著作集 第七卷 一九七四
 - (20) 6に同じ
 - (21) 西郷信綱『古事記注釈』第二卷 筑摩書房 二〇〇五、西條勉「アマテラスとタカミムスヒ」『上代文学』上代文学会 二〇〇五 第九十四号
 - (22) 斎藤英喜「アマテラス、戦う女神から皇祖神へ」『読み替えられた日本神話』講談社現代新書 二〇〇六
 - (23) 西郷信綱『古事記注釈』第四卷 筑摩書房 二〇〇五、西郷信綱「大嘗祭の構造」『古事記研究』未来社二〇〇二(初版一九七三)
 - (24) 19に同じ
 - (25) 西郷信綱『古事記注釈』第二卷 筑摩書房 二〇〇五
 - (26) 斎藤英喜「アマテラス、戦う女神から皇祖神へ」『読み替えられた日本神話』講談社現代新書 二〇〇六
 - (27) アンダソヴァ・マラル「古事記におけるオホクニヌシとシャーマニズム―「天の御饗」の考察を通して―」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇 第三十八号 二〇一〇
 - (28) 19に同じ
 - (29) タカミムスヒは「高木の神」と呼ばれるところもあるが、それはタカミムスヒの別名であるという古事記の記述に従いたい。古事記では以下のように記されている。「この高木の神は、高御産巢日の神の
- 別名ぞ。」「古事記」(新潮日本古典集成) 西宮一民校注 新潮社 二〇〇五 (初版 一九七九)
- (30) 3に同じ
- (31) 19に同じ
- (32) 12に同じ
- (33) 三浦祐之『古事記の秘密』吉川弘文館 二〇〇七
- 原典
- 『古事記』(新潮日本古典集成) 西宮一民校注 新潮社 二〇〇五 (初版 一九七九)
- 『日本書紀』(新編日本古典文学全集) 小島憲之 直木孝次郎 西宮一民校注 小学館 二〇〇三
- (Andassova Marai 文学研究科 仏教文化専攻)
(指導: 斎藤 英喜 教授)
二〇一〇年九月三十日受理